

「主の眼差しに導かれて」

ヨハネによる福音書1章43～51節

2019年も年明けから早一月が過ぎ、2月を迎えましたが、新年の新しい日々を皆様はどのようなお過ごしでしょうか。お一人おひとりがそれぞれに良いスタートを切れたなら、うれしいかぎりです。新しい年もまた、イエス・キリストのいのちにあずかり、そこに私たちの希望を見出していけたらと願っています。

実際、私たちの人生というのはいろんなことがあるものではないでしょうか。また、私たちの教会というのも同じように、いろんなことがあるように思われます。そして、与えられた生を正面から真摯に生きようとする者にとって、それは様々な思いを引き起こすものともなります。そうしたなか、繰り返し考えさせられるのは次のようなことです。「そんなふうにはいろんなことが起こってくる人生や教会の中で、私たちはいったいどのように生きていったらいいのか。そのような中で、信仰を持っていわゆる『信仰的』に生きるとは、いったいどういうことなのだろう？」事実、こうした疑問は誰にとっても間違いなく日ごとのことであり、他人事でない身につまされる問題ではないかと思われます。いつも考えさせられ、繰り返し聖書に問いかけずにはおれない問題です。今月はそのことを「私たちの生き方」の問題として、また「教会のあり方」の事柄として主イエスに問いかけ、そしてその言葉に御一緒に耳を傾けてゆければと思います。曆的に言っても今月はまだ2月で、かろうじてながら、新年スタートの期間内です。新しい年の立ち方、歩き方について、それぞれにいま一度、思いを巡らしてみても悪くないのではないのでしょうか。

そのようなひとときを、今回は一人の信仰者の証しを御紹介することから始めさせていただきたいと思えます。「清水 恵三」という牧師がおられます。正確には、おられました。長野県の日本基督教団信濃村伝道所で17年間牧会された後、東京の三鷹教会に転任。召されるまでの14年間、そこで牧師の任に当たられました。途中、町田にある日本基督教団の農村伝道神学校で教鞭を執られ、校長代行まで務められた方でもあります。清水牧師は生涯をかけて、命がけて説教をされた先生でした。実際、三鷹教会の会員に高戸 要という劇作家がおられますが、その高戸さんは次のように語っておられます。「聖書の言葉が『ナマミのカラダ』をさしつらぬき、『心魂に徹する』ものとしてひびき、説教となってほとぼしり出た」。清水先生は1987年、急性骨髄性白血病のために天に召され、56年の生涯を閉じられました。病床からなされた説教や病床から教会に宛てて出された手紙などを取めた『近づきたもうキリスト』という本が教文館から出ていますが、それを読むと、清水牧師の壮絶とも言える生き様が伝わってきます。信仰に厳しい、そして何よりも自分に厳しい先生でした。

ところが、その一方で、『手さぐり信仰入門』という 清水先生のもう一冊の本を開くと、先生のそんなイメージにそぐわないような、少々意外にも感じる文章に出くわします。少し長くなりますけれども、聖書の信仰の核心に触れる内容ですので、不足のないように紹介させていただきたいと思います。

自分の生命^{いのち}を捨てて、人の生命を助けた人たちの偉大さを思わずにはおれません。その事は、人を愛するという事を思う時に、どこか心の底で重く重く私を引きおろします。自分の生命を捨てて、他の人の生命を救うということは、イエスキリストの十字架と結びつきます。それは私にはできないという点で、いやおうなく納得できるのです。私にはできないということが、私にとって人生問題の根柢^{ねぎ}になっています。

しかし、一つの問題がひそんでいます。身代わりになってくれた人への感謝^{みづか}が自らの内からだけでなく、まわりからも強要される時、感謝は感謝でなくなり、恵みは恵みでなくなります。ヒューマニズムからキリスト教を信じた有島^{ありしま} 武郎^{たけお}は遂にキリストの愛に耐えられなくなって、「惜しみなく愛は奪う」と叫び、キリストの愛が大きければ大きいほどキリストは人間の愛を要求し奪うと結論づけ、キリスト教を去り、奪い合う愛の中で情死^{じょうし}して行きました。キリストは私たちの愛を要求し、感謝を強要し、その逃^{のが}れられない証拠として罪を指摘し、罪意識をかきたて、人間を奪う方でしょうか。そこにはもはや、恵みはありません。そのような教理にはどこか人間の心を支配し、奉仕と服従^{ごうだつ}を強奪する人間の悪^{あく}だくみがひそんでいるように思います。それとも、私が甘えているのでしょうか。

私は、キリストが私のために私の身代わりとなって死んで下さったということを、本当は知っていません。知っていたら、苦しくて生きられないはずです。私はキリストに対して感謝しているとは言えません。本当に感謝していたら、おちおち寝てもいられないからです。しかし、だからといってキリストを知らないのでもなく、感謝していないのでもありません。変な言い方しかできませんが、私はキリストを知らないのに、キリストは私を知っていて下さると思います。私はキリストに感謝できないのに、その私をキリストは愛して下さっているように思うのです。全く虫がいい話ですが、強いて言えば、感謝できない私を受け入れて下さっているように思えて、嬉し^{うれ}がっているのです。けちけちと感謝してるようなふりをする私を支えるだけでなく、感謝をすることに全く鈍感である私を承知して、感謝しなくていいような仕方で死んで下さっていることに感謝しているのです。それが私の感謝です。パウロが「今では神を知っているのに、否、むしろ神に知られているのに」と言い換えたように、神さまは私たちの知る対象ではなく、私たちを知って下さっている主体なのだという事を本当に嬉しく思います。

無理をして感謝をしないほうが、感謝を味わうことができるように思います。感謝しなくてもいいんだと思ったとたんに、感謝の思いがぞくぞくと湧いて来ます。感謝のあ

らわれとして奉仕するとか伝道するとか、変なお返しをするようなことを言わなくてよいと思ったとたんに、何かしたくなって来ます。それほどうまくはいかないにしても、精一杯生きたいものです。少なくとも、神さまの代理みたいにおっかない顔をして、自分のことは棚に上げたまま、他人に文句ばかり言うようなことはしないで生きたいものです。

神さまの恵みは、感謝しなくてもよいほどに大きく、怖るべきものなのです」(一部略)

通常のいわゆる「信仰的」と呼ばれる言い方からすると、一見、不信仰で不見識な物言いにも聞こえる文章です。けれども、これは何よりも御自分に厳しい清水先生の信仰から出た言葉であって、そこには逆説的な言い方の中に聖書の信仰の真理が語られ、イエス様の福音の真理が示されているのではないのでしょうか。それは、「私たちが神を知る以上に、神様が私たちを知ってくださっている。だから、『ねばならない』や『べきである』といった義務感にお尻を叩かれるような、有無を言わさず上から押しえつけるような信仰は脇にやっていい」というものです。真つすぐな向上心さえあれば、作りものでない内から湧き出る自然な信仰こそが大事で、イエス・キリストの神様はそれを受け入れ、豊かに育てくださる。聖書の神様はそれほど大きくて「懐」が深い、というのです。清水先生が壮絶な牧師生活を全うできたのも、御自分がこの大きくて温かな神様の眼差しの中にあることを知っておられたからではないのでしょうか。

私たちは今月、ヨハネによる福音書の1章43節以下から聖書の語りかけを聴こうとしています。イエス・キリストを別にして、主役として登場するのは「ナタナエル」という人物です。ナタナエルについては、聖書の記す人物像は極めて限られています。今回の箇所以外でナタナエルが登場するのは同じヨハネによる福音書の21章で、甦よみがえられたイエス・キリストがティベリアス湖畔で弟子たちに御自身を現わされたときの記事だけです。しかも、そこに記されているのは「名前」と「出身地」だけ。すなわち、ナタナエルはガリラヤのカナ出身だった、ということだけです。その意味で、ナタナエルの人となりについて具体的に知ることができるのは、実質、今月の箇所だけと言えます。

では、ナタナエルとはどんな人物だったのでしょうか。いみじくも、47節にイエス様のナタナエル評が記されています。「見なさい。まことのイスラエル人だ。この人には偽りが無い」。イエス様はそう言われます。イエス様から「真実な人」と言われる。なんとという光栄でしょうか。考えてみれば、やはり、何より「真実な人」と呼ばれたい。そこからほど遠い自分ながら、やはり「真実な人」と呼ばれたら、人間としてこれ以上の喜びはないと思わされます。

とはいうものの、その一方で、「なら、ナタナエルは完全な人間だったのか。イエス様はナタナエルを、いわゆる信仰的に出来上がった人間と言われたのだろうか」と、そんな疑問が湧くのも事実です。実際、フィリポとのやり取りを見ると、そこには決して信仰深いとは言えないナタナエルの姿があります。イエス・キリストに出会ったフィリポがナタナエルに言います。

45 節、「わたしたちは、モーセが律法に記し、預言者たちも書いている方に出会った。それはナザレの人で、ヨセフの子イエスだ」。そのとき、ナタナエルは何と答えたでしょうか。ナタナエルはこう答えるのです。46 節、「ナザレから何か良いものが出るだろうか」。「ナタナエルはトマスと双子である」と書いている注解書があります。イエス・キリストの復活を信じず、「手に釘の跡を見、この指を釘跡に入れてみなければ、また、この手をそのわき腹に入れてみなければ、わたしは決して信じない」（ヨハネ 20：25）と言った、あの弟子のトマスです。しばしば、疑い深い人間の象徴として引き合いに出されます。そのトマスとナタナエルは双子だったというのです。もちろん、現実には双子だったわけではありません。イエス様を信じなかったという意味で、疑い深い人間性を共有するという意味でふたりは双子だったというのです。ナタナエルは間違いなく、信仰的に出来上がった「完全な人間」ではありませんでした。

ナザレはガリラヤの小さな貧しい村で、ナタナエルの村・カナと同じ地域にありました。ナタナエルはナザレの様子を見聞きして、知っていたのでしょうか。フィリポが「ヨセフの子イエスだ」とわざわざヨセフの名前を出したのも、ナタナエルがヨセフを知っていたからかもしれません。いずれにせよ、ナタナエルは「あのナザレから救い主が出るなどと、誰が信じられようか」と、興奮するフィリポにけんもほろろに答えたのでした。ナタナエルにとっても、救い主はやはり、人々の目を奪う人並み外れた華やかさで装っていなければなりません。この世離れしたオーラを輝かせていなければなりません。「何の取り柄もない、どこにでもある小さく平凡な村・ナザレなどから、どうして救い主が出ようか」。ナタナエルもまた、人々と同じ思い込みで囚われていました。私たちはいつも心していなければならないのではないのでしょうか、救い主を自分好みのイメージに設けないように。聖書が記すイエス・キリストをこそ 救い主として礼拝するよう、いつも心していなければならないのではないのでしょうか。

ナタナエルを思い込みから抜け出させたのは、その真実でした。自分の目を絶対として、何から何まですべて自分で判断し、自分で見出せると考える私たち。そして、自分の基準に合わないイエス・キリストなど 救い主でも何でもないと、ソッポを向く私たち。ナタナエルは、その落とし穴にはまりませんでした。それは、ナタナエルが真実だったからにはほかなりません。47 節で「偽り」となっている語は、英語の聖書では「狡猾さ (guile : RSV)」とか「だますこと (deceit : NRSV)」とかいうふうに訳されています。「狡さ」ということです。翻訳の厳密さで定評のある、岩波書店から出されているいわゆる「岩波訳」も「(あの人には)裏がない」と、このところをそのように訳しています。新約聖書はギリシア語で記されていますが、原語のそのギリシア語 (δόλος, -ου, ὁ) では、この語は元々「釣りの餌」を意味しました。しかし、釣り師も賢くなります。生き餌に似せた偽物を、すなわち「擬似餌」を考え出し、魚を騙して取るようになりました。こうして、時とともに、この語は狡賢い「騙しのあれこれ」を意味するようになっていきました。このように、イエス様が「ナタナエルには偽りがありません。ナタナエルは真実な人間だ」と言われたとき、それはまさに その内に狡さがなく、すなわち 真つすぐでごまかさないことを言われたのでした。ナタナエルの真つすぐさは、イエス様の言葉に対するその応答からもよく分かります。「あな

たは真実な人間だ」と褒められたら、私たちならどう答えるでしょうか。きっと、内心悪くない気持ちに浸りながらも、が表向きは「いやー、そんな。私はそんな・・・」と謙遜をぶるにちがひありません。しかし、ナタナエルは違いました。「どうして わたしを知っておられるのですか」(48) と、即座に問い返します。ストレートで正直な言葉です。「偽りが無い」とは「完璧で罪がない」ということではありません。何事にも真つすぐに向かう。自分の足りなさにも醜みにくさにも真つすぐに向かう。そうした、狡さのない真実なあり方にほかなりません。ナタナエルは、そんな人物でした。そして、それこそ、イエス・キリストが何より尊とうとばれるものだというのです。

それにしても、この後、どこかピンとこないやり取りが続きます。21 世紀に生きる私たちが聖書に触れるときに繰り返して欲すもどかしさです。ナタナエルの問い返しに対し、イエス・キリストは答えられます。48 節、「わたしは、あなたがフィリポから話しかけられる前に、いちじくの木の下にいるのを見た」。すると、ナタナエルは、何かに打たれたかのように言います。49 節、「ラビ、あなたは神の子です。あなたはイスラエルの王です」。しかし、これだけではやはり、どういうことなのかよく分かりません。実は、ユダヤでは、イチジクの木は平和と繁栄の象徴として、多くの人が自宅に植えていた 極めてポピュラーな木でした。しかも、パレスチナは夏になると連日、厳しい暑さが続きます。エアコンなどない時代です。そんなとき、人々が愛したのは木陰こかげでした。とりわけイチジクの木は多くの家があり、しかも大きく成長して格好の木陰を提供したことから、聖書の学びや祈りの場所として広く用いられました。フィリポは 44 節にガリラヤの町であるベトサイダの出身であったと記されていることから、同じガリラヤ出身のナタナエルと友人関係にあったのでしょう。時にイチジクの木陰で聖書を読み合い、語り合い、祈り合ったのかもしれませんが。今月の箇所は、そのようにして、ナタナエルがいつものように 自宅のイチジクの木陰で聖書を読んで黙想していたときのことと思われる。そのころ、イエス様はガリラヤへの途上、フィリポに出会われます。そして、イエス様の招きに従ったフィリポがガリラヤに着くやすぐさま、ナタナエルの家に駆け込んで、興奮しながら告げるのでした。「来るべき救い主きたがついに来てくださった」

ナタナエルの心を打ち、瞬時にイエス・キリストへの信仰告白に導いたのは、ナタナエルがイチジクの木の下にいるのをイエス様が物理的に見られたからではありません。イエス・キリストの千里眼に驚かされたからではありません。そうではなく、イチジクの木陰で思いを巡らしていたその自分の切なる祈りを、主イエスが全く見抜かれたからでした。「私の心を知っておられる方がいる。何年もの間 祈り求めてきた、その私の心を知っておられる方がいる。私の心をその奥底まで知っていてくださり、そこに温かな眼差しを注いでくださっている方がいる」。ナタナエルはたしかに、疑いの人でした。しかし彼は、心に偽りのない真実な疑いの人でした。イエス様はそのナタナエルを知っていてくださり、そのナタナエルに導きの眼差しを注いでくださったのです。宗教改革者の一人にカルヴァンという人がいますが、そのカルヴァンが言っています。「私たちはまた、この御言葉みことばから意味深い教えを学ばなければなりません。私たちがキリストのことを忘れていたそのときにも、キリストは私たちにその眼差しを注いでくださって

いることです。であれば、きっと、こうも言えるにちがいありません。私たちがキリストを離れているそのときでさえ、キリストはもう一度、私たちを御許に連れ戻して下さると」

もう 39 年も前になるでしょうか。アメリカの神学校で学んでいた時のことです。牧会カウンセリングという、教会でのカウンセリングのクラスを受講しました。アメリカの教育の優れた点の一つは、実体験を大切に、クラスでも可能なかぎり それに近い場を提供しようとする事です。物事をできるだけ肌で感じ取らせようとする事です。ある日、一人の御婦人がクラスに招かれました。50 を少し過ぎた方でした。静かで落ち着いた、そこはかとなく上品さの漂う方でした。けれども、教授の説明の後、彼女が口を開くと、クラスは張り詰めた空気のなか、その一言ひと言に引きずり込まれていきました。交通事故で娘さんを亡くされたときの言いようのない苦しみと神への恨みつらみを、その時の心情を思い起こしながら、私たちの前にリアルに再現し始められたのです。事故はほぼ 1 年前に起こりました。その折の悲しみは依然として、昨日の事のように疼いているようでした。娘さんは夏の休みに車で帰省していました。事故は、親元でしばらくのんびり過ごした後、「やることがあるので早めに帰る」と言って、夕方、車で再びキャンパスに戻っていったその途中で起こりました。運転が夜にかかり、しかも折からの雨もあって、暗い道でスリップして横転。帰らぬ人となってしまったのです。母親であるその御婦人を襲ったのは、何よりもまず 自責の念でした。「あのとき、もう一晩ゆっくりして 次の日帰るように言えば、こんなことにはならなかったのに。どうして そう言わなかったのだろう。あの娘は、私が殺したんです」。そう言って、私たちの前で顔を覆われました。そして、それに続いたのが、神への恨みつらみの言葉でした。「なんで、娘がこんな目に遭わなきゃならないの。なんで、私たちの家族にこんなことが起こらなければならないの。神様はなんで、こんなひどいことを私たちに……。なんで 神様は……。神なんか、糞食らえ」。その時の苦しみを こう表現されました。そんな、ただただ苦しいばかりの日々が半年以上も続いたといいます。「今だって、傷は毎日のように疼き続けています」とも言われました。こうして話を締め括られたのですが、その締め括りの言葉は次のようなものでした。それは私たち・クラスで学ぶ者たちにとって何にも代えがたい言葉となったものであり、同時に、私たち自身にとっても深い慰めとなった言葉でした。

今もって傷が疼くなか、私がなぜ 皆さんのクラスに出てきて、ここに立ったかお分かりでしょうか。それは、一人の牧師の言葉を皆さんに伝えたかったからです。私が救われたのは、その先生の言葉によってだったからです。「それでいいんです。遠慮することはありません。思いっきり、神様に悪態をついたらいい。真っすぐ、正面からついたらいい。神様は、ケチなちっぽけなお方ではありません。大きなお方です。真実な叫びを邪険にされるようなお方ではありません。神様は、言葉にならないあなたの苦しみを御存じでいてくださる。嘘のない、正直なあなた自身をぶつければいいのです」。私はこの一言で救われ、今、ここにこうしていられるのです。

本心を抑え込んで隠すことが信仰だと思っている人々があります。「こうでなければ信仰的でない」と、一所懸命、外の形を整えようとする人たちがいます。しかし、信仰ぶった装いは、信仰とは異なります。イエス様が求められるのは偽らないことであり、狡賢くないことであり、ぶらないことです。正直で真つすぐな自分を神様**にぶつける**ことであり、自分の真実を吐露して、神様がそこに御自身の出来事を起こしてくださることを待つことです。神様は、私たちの真実に御自身の真実をもって応えてくださるからです。

イエス様はナタナエルを見て、「見なさい。まことのイスラエル人だ」と言われました。ナタナエルはこれに**応えて**、「あなたはイスラエルの王です」と言い表わしました。それは一方で、狡さのない真実な人の象徴として言われたものであり、また一方で、すべての人々の王を意味するものとして言い表わされたものです。ナタナエルは私たちが**あるべき姿**の象徴であり、イエス・キリストは私たちすべての王だからです。

そして最後に、イエス様は驚くナタナエルに**いま一度**、追い討ちをかけられます。50 節、51 節、「もっと偉大なことをあなたは見ることになる。・・・天が開け、神の天使たちが人の子の上に昇り降りするのを、あなたがたは見ることになる」。「人の子」とは、イエス様自身が御自分の呼び名として用いられた呼称です。イエス・キリストの呼び名には、様々あります。こうして読み進めているヨハネ福音書の冒頭だけでも、「言」「まことの光」「神の小羊」「神の子」など、幾つも出てきます。しかし、それらは多くの場合、他の人々が付けた呼び名でした。イエス様は通常、御自身を「人の子」と呼ばれました。それは、一貫したメッセージが込められた呼び名でもありました。「人となって低く生き、私たちの苦しみをその身に負われた。そのようにして人に仕えるその愛の姿の中にこそ、神の独り子としての栄光がある」というメッセージです。

「神の天使たちが人の子の上に昇り降りする」というのは、象徴的な表現です。この先、福音書のどこにも そうした出来事は記されていません。それは、イエス・キリストこそ 天と地を結ぶ架け橋であり、神の事柄を人に示す器である、という意味にほかなりません。破ればかりの私たちが、自分の力でどうして 天に上れるのでしょうか。本当に知らねばならぬことすら知らない私たちが、自分の知恵でどうして 神のことを知りうるのでしょうか。イエス様は私たちのいるこのところに降りてきてくださり、私たちの目を開き、真実 知らねばならないことを身をもって教えてくださいました。イエス・キリストは神様の愛を携え来られて、私たちの間に神の出来事を起こしてくださいます。「神の天使たちが人の子の上に昇り降りする」とは、そういうことです。

今回のナタナエルの物語には、**字面**を追っているだけだと気づかずに読み過ぎてしまう イエス・キリストの福音の大切な真理が秘められています。それは、ナタナエルがイエス様を見つけたのではなく、**イエス様のほうで**ナタナエルを御覧になっていたという事実です。一見、なんともないように思われるかもしれませんが、この事実は聖書の福音の根幹に通じる 恵みの真理を含んだものです。イエス・キリストは後に、ヨハネによる福音書の別の箇所**で**「あなたがた

がわたしを選んだのではない。わたしがあなたがたを選んだのである」(ヨハネ 15:16)と言われます。これは直接的には たしかに弟子たちに向かって語られた言葉ですが、しかし本質的には、私たちのすべてに宛てられた言葉でもあります。すなわち、移り気で気ままな私たちは、気の向いたとき・気の向いたところだけで、神様に目を向けます。ですが、「イエス・キリストの神はそうではない。私たちの勝手に関係なく、私たちがどうあれ、この私たちを御覧になってくださっている。いつどこにあっても、慈しみのその眼差しを注いでくださっている。神様の眼差しが私たちから離れることはない」。根っこのところで、そう語るものにほかなりません。そもそも十字架そのものが、私たちが神様にソッポを向いていたとき、それにもかかわらず 私たちの信心に先立って、この私たちすべてのために 神様のほうから備えてくださったものではないでしょうか。

初めに御紹介した清水恵三牧師は、長野時代に出し始められた『辺境通信』という月刊誌に 次のような一文を記しておられます。

先日の野尻湖一周ハイキングのあと、二番目のおすめがこんな作文を書きました。「きょう、わたしたちかぞくみんなで、のじりこーしゅうをしました。すこしつかれたけど、ほんとにたのしかったです。いろいろの木のみや、花のさいたあとのみや、いろいろのものがとれました。つかれた人は おとうさんと手をつなぎます。わたしも、つかれてつまずいたりしました。けれども、おとうさんと手をつなぐと、ふしぎにげんきがでてきます。おとうさんの手はとても大きくてあったかいので、とてもじぶんの手があたたかくなります。また行きたいと思います」

私はやたらに感動してしまいました。そして、ふと、こんなことを考えました。気恥ずかしいし、不遜なことだと思うのですが、「イエスさまの手」のことです。イエスさまの手の温かさを知っていた人たちの書いた聖書のことです。イエスさまは病人に手を触れ、子供の頭に手を置き、弟子たちの手をとられたに違いありません。その人たちは、そのことが忘れられたでしょうか。(一部略)

そして、同じ「イエスさまの手」ということに関連して、前述の『手さぐり信仰入門』でこう語ってもおられます。御自身の「信仰の告白」とも言える言葉です。

手さぐりの手を私たちは精一杯のばして、信仰の道を進むために歩いて来ました。どこまで、どこまで一体、手がのばせたのでしょうか。そして、何を探してあてたのでしょうか。暗闇の中で手をのばして、今、手に握っているものはなんのでしょうか。まだ、私の手は不安気に半開きしたまま、さし出されています。ただ、手首のところを、誰かがぐいと握っているように思えるのです。そして、少しずつ少しずつ、前にひっぱられて行くよ

うな思いがするのです。その手は温かく、強く、大きく、私の手首を完全に包んでいます。それは、私が何かにつまずいた時、しりごみしようとする時、急に力を増します。ふんわりと温かかった手が、強い手になります。

これから先、どれだけこの暗い^{トンネル}隧道が続くか見当もつきません。しかも、この手にひかれて歩く歩き方にも まだまだ慣れていません。しかし、このような歩き方以外に何かあるでしょうか。何ができるでしょうか。

もうそろそろ、わが内に思い乱れることから一步を踏み出さなければなりません。導きに委ねて歩み出さなければなりません。うなだれて屈した^{ひざ}膝をのぼし、忘えなければなりません。私たちが主の^{あと}後に従うのではなく、主が私たちの手首をつかんで導いて下さるからです。「あなたがたがわたしを選んだのではない。わたしがあなたがたを選んだのである。そして、あなたがたを立てた」と、主イエスが言っておられるからです。手さぐりの手を、神さまが支えて下さいます。羊飼いいエスさまが先導して下さいます。たとえ、手さぐりの手が力を失い、なえてしまっても、手首が握られているからです。(一部略)

清水先生の語られる「イエスさまの手」は すなわち、ナタナエルに注がれた その眼差しにほかなりません。私たちが思い乱れてうな垂れ、そして力なく萎えてしまっても、イエス様の眼差しはそこにも変わることなく置かれています。私たちが落ち込んで、ブータレて悪態をついても、そこにも同じイエス様の眼差しが注がれています。それは、導きの眼差しです。温かく、強く、大きな御心でこの私たちを包んで導く善意の眼差しです。

イエス・キリストはナタナエルの思いを知ってくださっていました。私たちの思いもまた、知ってくださっています。聖書で「知る」とは、「愛する」ことをも意味しています。私たちはイエス様に知られている。イエス様に愛されています。

いろんなことが押し寄せる、この私たちの人生です。いろんなことが繰り返される、この私たちの教会です。けれども、そんななかにあってもなお、聖書の出来事から知らされることのあるのではないのでしょうか。そして、信じることのできる者とされることのあるのではないのでしょうか。イエス様の眼差しを知らされ、その伴いの約束を信じる者にされるということです。なんといいのでしょうか。なんと感謝なことでしょうか。そこに信頼を置いて、できる限りの精いっぱい生きていきたいと思わされています。

〔祈り〕

行く^ゆ手に道を開きたまう、私たちの主なる神様。

過ぎし時、様々なことが私たちの周りに、私たちの間に、そして私たちの内にありました。うれしく心躍ることもありました。感謝をいたします。しかしまた、同時に、悲しく心痛むこともありました。今なお その痛みに^{さいな}苛まれている一人ひとりに、どうか このとき、あなた御自身が臨み、あな

たの伴いと慰めをもって その傷を癒やして下さいますように。

私たちはここまで、あなたの御手の内^{みて}にあって、その中を歩んでまいりました。その道筋をあなたの御座^{みざ}から振り返ることのできる、そのような信仰の目を与えてください。そして、この先の行く手も同じあなたの御手の中を歩んでまいりますから、どうぞ、すべてをあなたの恵みの御座から望み見ることのできる そのような信仰をお与えくださいますように。

御子の名によって集うすべての教会の歩みを どうか、確かに支え導いてください。教会に集うお一人おひとりを どうか、豊かな顧みをもって守り導いてくださいますように。そして、すべてをあなた祝福の内に置いてください。

慈しみの主 イエス・キリストの御名によって願い、お祈りいたします。

アーメン